

ヶ浦および千曲川における抽水植物の成長速度と生産力。日陸水甲信越報。No.10, 20～21.

桜井善雄 (1991 a): 抽水植物群落復元技術の現状と課題。水草研究会報。No.43, 1～8.

桜井善雄・芋木新一郎・田代清文 (1991 b): 湖岸・河岸の植栽時における土壌侵食防止材料の検討 (第1報)。水草研究会報。No.43, 9～12.

○桜井善雄著『水辺の環境学—生きものとの共存』(新日本出版社、1991年7月、222頁、1,400円)

当会の副会長でもある著者は、水辺のあり方について、そこに命を育む生物を重視する生態学の立場から研究と実践を続けてこられた。それは、本書の前書きにもあるように野生の生きものとの共存可能な環境の維持と創造が、人類の永続的な生存を保障する最善の道と考えられるからである。機械力にもものを言わせた水辺の改変や水質汚濁への無自覚な加担によって、われわれ人間が失ってきたものはあまりにも多い。その悲しい現実に気付き、今、水辺環境への関心は急速に高まりつつあるが、いったい何が問題であるのか、そして、どうすれば望ましい水辺の姿が復元できるのかということになると、まだまだ我々の知識は不足している。その様な現実のなかで、さまざまな水辺のありようを見ながら著者が感じたこと、考えたことを書き綴ったのが本書である。「月刊・水」誌に連載されたものがもとになっているという。話題は多岐にわたり、文章も明快である。“生きものとの共存する水辺のあり方を考える糸口”として、会員の皆様の一読をお薦めしたい。(角野康郎)

○上野雄規(編)『北本州産高等植物チェックリスト』(東北植物研究会発行、1991年8月、365頁、頒価6,000円、送料410円)

東北地方6県に茨城、栃木、群馬、新潟の4県を加えた北本州に産する維管束植物のチェックリストである。上記10県から報告されている植物4,228種が整理されている。このチェックリストの基礎になったのは、各県で出版された植物誌類と諸報告などの文献であるが、なかには分布上の疑問を残したまま取り上げざるをえなかったものもあるという。それも、この地方の植物相を把握するための基礎資料として編集されたものであってみれば、やむをえないことだろう。むしろ、このようなチェックリストが完成されたことで、今まで曖昧であったことがはっきりすれば十分にその役割を果たせる。

さて、本書の特色は、各植物の分布が県毎にひとつの点で示された分布図にあるが、これを通覧するだけでもたいへん興味深い。図鑑で東北地方に分布するとあっても、青森県まで北上しているのか、それとも東北部にだけ産するのかは不明で、案外不正確な情報しか持っていない種が多いが、本書の分布図をみれば、北本州における分布実態は一目瞭然である。水草に関して言えばコカナダモが東北では宮城県と秋田県には分布を広げているが、まだ他県からは記録されていないことなどがよくわかる。一方、エゾミクリのように岩手県と福島県にしかプロットがないが、他県にも産するはずだと思われるものもある。

本書の前書きにも記されているとおり、調査の不十分な地域がはっきりしたり、再検討を要する分類群が浮き彫りにされることが、より完全な植物誌のために必要なのであろう。尚、本書に関する照会は、〒989-02 宮城県白石市城北町7-28 上野雄規様方 東北植物研究会へ (角野康郎)

○「水草利用研究会会報 No.1」(1991年5月)

しばしば邪魔者扱いにされる水草だが、その特性を生かして人間生活に利用する方法はないのか? そのような問題を研究し、実践していこうという研究会が誕生した。ここでいう利用とは必ずしも物質的なものに限定されず、人間環境の中で水草の果たす役割にも目が向けられているように思える。会報第一号の内容は次のとおりである。

「水草利用研究会に想う」(蒲原幸生)、「水草の有利用と利用に関する二、三の考察」(小野田義輝)、「いま、なぜパピルスか、なぜ、いま環境風車か」(形山順二)、「泥の中の微生物紳士録」(森永 豪)、「水草利用研究会に寄せて」(山莊 勉)、「菰池におけるホテイアオイ利用の水質改善事業について」(貝塚耕一)、他。

連絡は 〒562 大阪府箕面市箕面5-14-58 岡村大一郎氏まで。